

修士論文（要旨）
2012年1月

青年期の抑うつ傾向に影響を及ぼすレジリエンスおよびソーシャルサポートについて

—自尊感情およびバウムテストの諸指標との関連—

指導 山口一教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
210J4003
遠藤 新

目次

| | |
|--------------------|---|
| I .問題と目的 | 1 |
| II .方法 | 1 |
| 1 .調査対象者と手続き | 1 |
| 2 .調査用紙の構成..... | 1 |
| IV.結果と考察 | 2 |

参考文献

I. 問題と目的

近年、大学入学後、学校生活を能動的に送れず「不登校や引きこもり」「不本意ながらの休・退学」をする学生が増えるという問題が生じている。本研究では、学校不適應に対する予防という観点から、学校不適應の問題に影響を与えている因子の一つである、抑うつ傾向を取り上げる。抑うつ傾向は、不登校との関連 (Honjo ら, 2001)、引きこもりとの関連 (辻井ら, 1998)、学業成績の低下との関連 (森, 2009) 等が示唆されており、学校不適應に対する指標として研究していくことは意味のあることと思われる。抑うつ傾向を予測し得る要因としては、近年、諸外国で青年の健康教育に適用されている概念であるレジリエンス、学校ストレスを軽減させるとされるソーシャルサポート、多くの研究で健康や適應の指標と考えられている自尊感情、比較的無意識の自己像を投影すると考えられるバウムテストの諸指標を取り上げ、学校不適應に対する予防を考える上での基礎研究としていきたい。

本調査の仮説は次のように設定した。

仮説1 自尊感情が高ければ、そうでない場合に比べて抑うつ傾向は低いであろう。

仮説2 レジリエンスが高く、ソーシャルサポートが多ければ、そうでない場合に比べて自尊感情は高く、抑うつ傾向は低いであろう。

仮説3 バウムテストの諸指標は、レジリエンスおよびソーシャルサポート、自尊感情、CES-D に影響を及ぼす因子となるであろう。

II. 方法

1. 調査対象者と手続き

A 大学の学生 370 名を対象とした。手続きは、桜美林大学の授業の担当教員に了承いただき質問紙を配布した。学生には講義時間外で実施してもらい次週の授業後に回収箱を設置し回収した。

2. 調査用紙の構成

- ① フェイスシート：学年、年齢、性別、自分に影響を与えていると考えられる体験を記入してもらった。
- ② レジリエンス尺度：石毛ら (2005) が作成したレジリエンス尺度を用いた。
- ③ ソーシャルサポート尺度：嶋 (1992) が作成したソーシャルサポート尺度を用いた。
- ④ ローゼンバーグ自尊感情尺度：星野 (1970) の日本語訳をもとに、桜井 (2000) が修正したローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版を用いた。
- ⑤ バウムテスト：比較的無意識に捉えられている自己像を投影したものを測るために、コッホによって創始された投影法性格検査であるバウムテストを用いる。量的指標は①樹冠の高さ、②幹の高さ、③樹冠の幅、④幹の幅を、質的指標は①描画のサイズ、②用紙からのみだし、②描画の筆圧、③幹の輪郭線、④根の有無、⑤先端処理、④幹の上下、⑤樹皮、⑥枝の伸び方、⑦枝の先端処理、⑧特殊な枝、⑨枝の接合点、⑩樹冠の強調、⑪樹冠の形、⑫果量、⑬果の強調、⑭地平、⑮風景、⑯付属物、合計 20 項目のバウムテストの読み取り指標を作成した。
- ⑥ CES-D (The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale:CES-D) : Radloff (1977) によって作成された自己記入式抑うつ性尺度の日本語版 (島・鹿野・北村・浅井, 1985) を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

有効回答数は134名（男性47、女性87）となった。

本研究の結果（図1、図2）から、①レジリエンスは、直接的にも間接的にも抑うつ傾向を低減させる要因になり、自尊感情と密接な関連があること、②ソーシャルサポートは、レジリエンスとの関連が強く、直接的にも自尊感情に影響を及ぼしていること、③自尊感情は、抑うつ傾向に強い影響をもっていること、④バウムテストで捉えられる無意識の自己は、レジリエンスや自尊感情、抑うつ傾向、それぞれに独自に影響を与えており、楽観性や女性の抑うつ傾向はこのような無意識に捉えられる自己によって規定される部分が多いこと、⑤男女によって、抑うつ傾向に影響を及ぼすレジリエンスおよびソーシャルサポート要因に、違いがあることが示唆された。

抑うつ傾向を低めるためには、男性では、自尊感情および楽観性を高めること、他者依存性を低めることが有用であることが考えられた。そして、自尊感情を高めるためには、家族サポートおよび楽観性が重要な因子となることが示唆された。次に、楽観性を高めるためには、異性サポートが重要な因子となることが考えられ、また、情緒的な成熟や心理的葛藤や緊張の緩和が重要な要因であることも示唆された。最後に、他者依存性を低めるためには、自己の統制が重要な要因であることが示唆された。

女性では、男性と同様に自尊感情および楽観性を高めることが有用であることが考えられた。加えて、自己の統制の試みや、情緒の未成熟性、衝動の防衛が抑うつ傾向と関連していることが示唆された。そして、自尊感情を高めるためには、問題解決志向やそれに影響を与える同性サポート、楽観性が重要な因子であることが考えられ、また、自己に対する不安や無力感が重要な要因であることが示唆された。次に、楽観性を高めるためには、異性サポートが重要な因子となることが考えられ、また、自己に光をあたえることの願望や衝動の防衛が重要な要因であることも示唆された。さらに、男女ともに楽観性は、直接に抑うつ傾向を低減させるとともに、自尊感情を介して抑うつ傾向の低減に寄与することも示唆された。

以上より、仮説1は支持され、仮説2および仮説3は一部支持された。そして、抑うつ傾向の予防には、男性では家族サポート、自尊感情、楽観性を、女性では問題解決志向、自尊感情、楽観性を高めるアプローチが有用であると考えられた。

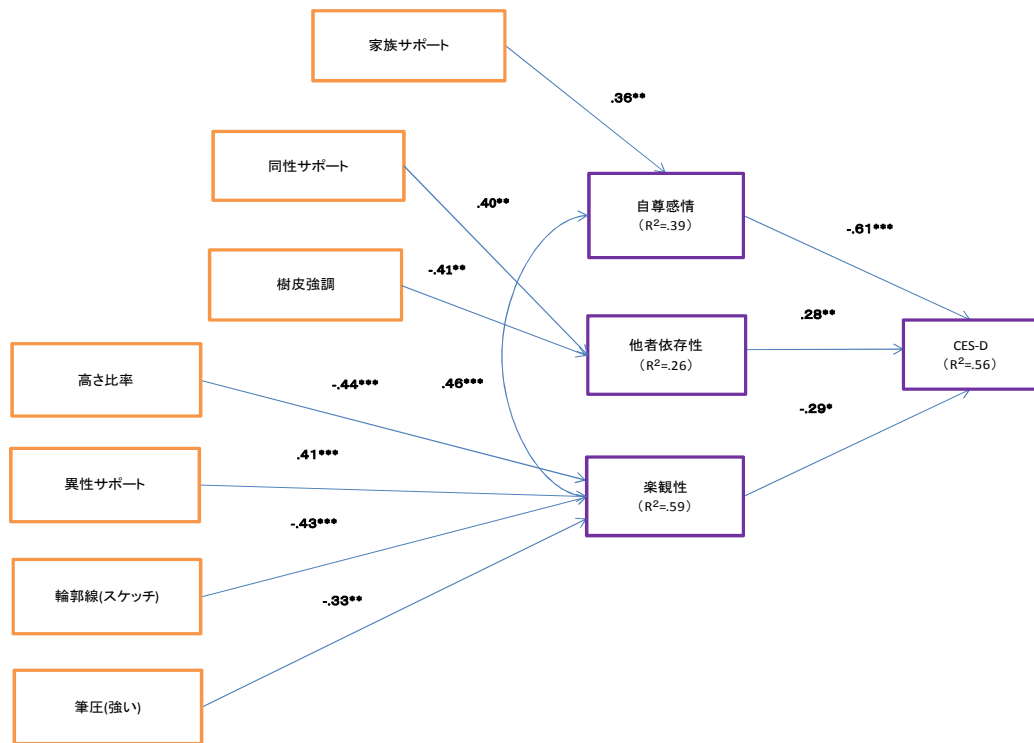


図 1 CES-D に影響を与える因子 (男性)

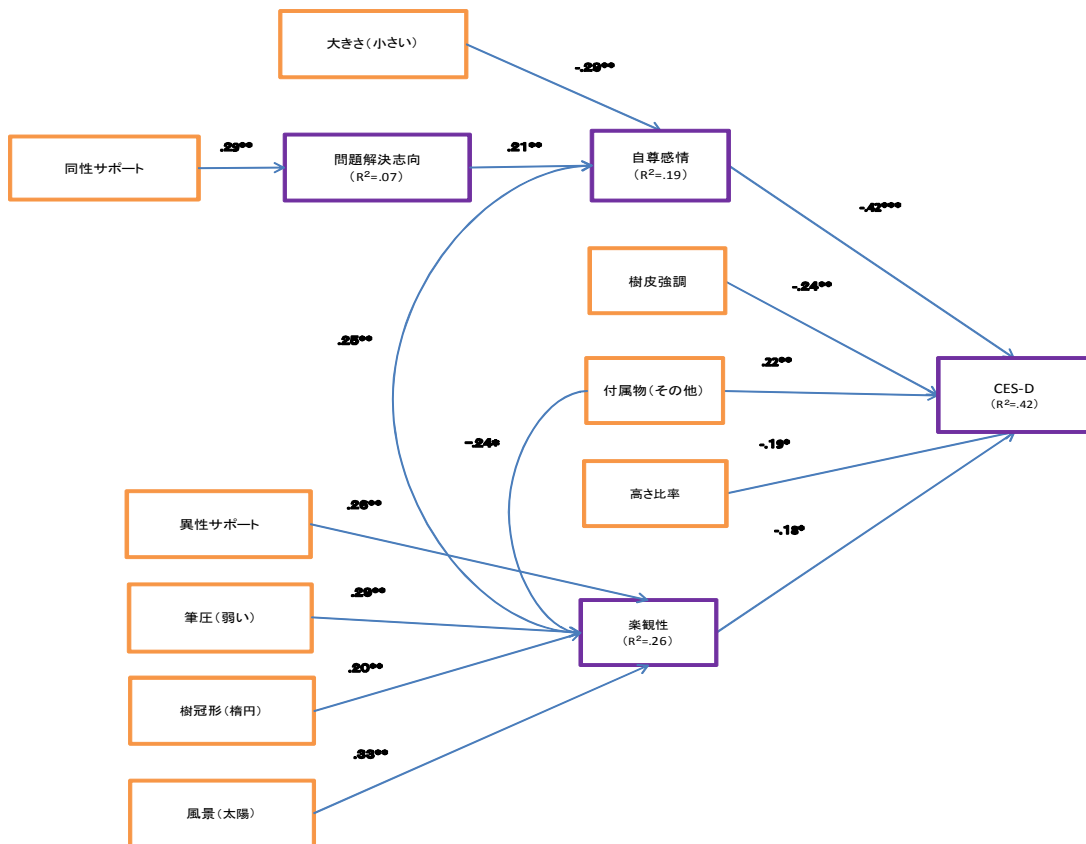


図 2 CES-D に影響を与える因子 (女性)

参考文献

- 青木健次 (1976) : 描画法の再検査信頼性 心理測定ジャーナル, 12, 11-16.
- 青木健次 (1980) : 投影描画法の基礎的研究 (第1報) 心理学研究, 51, 9-17.
- 藤岡喜愛・吉川公雄 (1971) : 人類学に見た, バウムテストによるイメージの表現 季刊人類学, 2, 3-28.
- Grotberg, EH (1995) : A Guide to Promoting Resilience in Children. Early Childhood Development : Practice and Reflections, No. 8 Bernard Van Leer Foundation The Hague.
- 原田宗忠 (2008) : 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係 教育心理学研究, 56, 330-340.
- 原田宗忠 (2010) : 青年期における自尊感情の揺れと自己像との関係—バウムテストを用いた調査研究から— 心理臨床学研究, 28, 3, 268-278.
- Honjo S, Nishide T, Niwa S (2001) : School refusal and depression with school inattendance in children and adolescents: Comparative assessment between the Children's Depression Inventory and somatic complaints. Psychiatry Clin Neurosci, 55, 629-634.
- 星野 命 (1970) 感情の心理と教育 児童心理, 24, 1445-1477.
- 石毛みどり・無藤 隆 (2005) : 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 一谷 彊 (1994) : バウムテストの実際・バウムテスト, 臨床描画研究IX, 19-40.
- 加曾利岳美 (2004) 神経症傾向およびうつ傾向のある大学生に見られるバウムテストの特徴—GHQ (General Health Questionnaire) を用いた定量的分析— 共栄大学研究論集 3, 106-121.
- 岸本寛史 (2002) : バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群 心理臨床学研究, 20, 1-11.
- 溝上慎一 (1999) : 自己の基礎理論 金子書房
- 無藤 隆・森 敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治 (2004) : 心理学 有斐閣 184-189, 437-441.
- 森山雅子・杉本英晴・安永和央・谷 伊織・五十嵐素子 (2009) : 短期大学生の心理的発達に関する縦断調査 (1) —抑うつの変動に関する分析— 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 330.
- 中園正身 (1996) : 一変法としての樹木画法の研究 心理臨床学研究, 14, 197-206.
- 仁尾かおり・藤原千恵子 (2006) : 先天性心疾患をもつ思春期にある人のレジリエンスの特徴 日本小児看護学会誌, 15, 2, 22-29.
- 大石郁美・岡本祐子 (2009) : 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 43-53.
- 小塩真司 (2001) : 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) : ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 桜井茂男 (2000) : ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究 12, 65-71.
- 嶋 信宏 (1992) : 大学生におけるソーシャルサポートと日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 1, 45-53.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985) 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- Radloff, L.S (1977) : The CES-D Scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, 1, 385-401.
- 高原宏典・横田正夫 (2010) : アパシー傾向と発達課題の達成度の関連—バウムテストを用いた総合的検討— 日本大学心理学研究 31, 22-28.
- 高橋雅春・高橋依子 (1986) : 樹木画テスト 北大路書房
- 遠山宜哉・佐々木大輔・豊嶋秋彦 (1994) : “不登校”の心身医療—大学生の事例— 心身医療, 6 (9), 1200-1205
- 辻井正次・本城秀次 (1998) 不適応現象の実際とその評価—児童期の抑うつ— 精神科診断学, 9 (2), 189-199.